

キャリア教育の視点を取り入れた小学校社会科の授業 — 5年生産業学習を事例として —

中 西 仁

はじめに

キャリア教育とは、もともとアメリカにおいて1970年代初頭から教育改革の一貫として展開されたものである。当時の連邦教育局長マーランドによればキャリア教育の主たるねらいは、

- i. 児童・生徒に職業選択に必要な基礎力をつけさせること
- ii. 児童・生徒に職業的な専門技能を習得させること
- iii. 児童・生徒に教育を意味あるものとして捉えられるようにすること
- iv. 児童・生徒が学習に積極的に臨めるように働きかけること
- v. 児童・生徒が全教科での成績を向上させること⁽¹⁾

である。即ち、子どもが学校での学び(学校知)を、いかに日常生活における生活知の文脈と同一線上に捉えさせるか、⁽²⁾ということを重視した教育であり、決して学校教育の目標を専門的な職業教育にシフトさせたものではない。

さて、日本では近年、ニートの増加などの若者の問題がマスコミでクローズアップされるに従って、キャリア教育の必要性が叫ばれている。文部科学省は、2004年1月に「キャリア教育の推進に関する総合的研究協力者会議報告書」をまとめた。同報告書によれば、キャリアとは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における

自己と働くこととの関係付けや価値付けの連鎖」(同報告書 p.7)であり、キャリア教育について以下のように定義している。

「キャリア」概念に基づき「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」ととらえ、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」(同報告書 p.7)

同報告書が発表されて、日本の学校現場、特に小・中学校におけるキャリア教育が本格的にはじまった。特別活動や総合的な学習におけるキャリア教育については実践研究が進みつつあるが、特に学校教育課程の中心である各教科の授業に於いて、今後どのようにキャリア教育の視点・内容・手法を取り入れていくかが大きな課題となっている。

以上のような現状を踏まえて、本稿では小学校5年生社会科の産業学習を題材として、社会科授業設計にどのようにキャリア教育の視点を取り入れるのか論じることにより、各教科の授業によるキャリア教育の進め方の一つのあり方を提示したい。産業学習を取り上げたのは、「仕事」「職業」を産業という観点から、幅広く学ぶ「まとまり」であり、キャリア教育と関連が図りやすいであろうと考えたからである。

1. 小学校社会科5年生業学習の概要

(1) 学習指導要領より

小学校学習指導要領(1999年5月)によれば、小学校5年生の社会科は「農業や水産業」の学習、「工業生産」の学習、「通信などの産業」の学習、「国土の自然などの様子」の学習という4つの大単元で構成されている。普通、産業学習と呼ばれるのは、「農業や水産業」の学習、「工業生産」の学習、「通信などの産業」の学習の部分である。ペティークラークによ

る産業の3分類(第一次産業・第二次産業・第三次産業)と対応した構成となっている。それぞれの単元の学習内容を、学習指導要領から順を追って見ていきたい。

まず、「農業や水産業」の学習内容は、以下の3点である。

- i. 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること
- ii. 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など
- iii. 食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働き

次に、「工業生産」の学習内容は、以下の3点である。

- i. さまざまな工業製品が国民生活を支えていること
- ii. 我が国の各種の工業生産や工業地域の分布など
- iii. 工業生産に従事している人々の工夫や努力、工業生産を支える貿易や運輸の働き

そして、「通信などの産業」の学習内容は、以下の2点である。

- i. 放送、新聞、電信電話などの産業と国民生活とのかかわり
- ii. これらの産業に従事している人々の工夫や努力

以上から各単元の学習内容は、「各産業の内容と存在意義」「地図や統計などの資料活用」「人々の工夫や努力」の3点を共通点としていることがわかる。

(2) 産業学習の類型

草原和博⁽⁴⁾によれば、産業学習の実践には大きく分けて、以下に紹介する①～④の4つのパターンがあるという。

① 国民道徳教育としての産業学習

この類型の特徴は、産業学習における「人々の工夫や努力」に焦点を当てて、そこから「勤労の価値」を学び取らせようとする立場である。草原

によれば、勤労の価値を学び取らせることは、地域経済の発展・国家経済の発展に寄与しようとする関心・態度を育てることにつながる。従ってこの類型を、草原は、「国民道徳教育としての産業学習」と呼ぶ。

② 日本地誌教育としての産業教育

この類型の特徴は、産業学習における「地図や統計などの資料活用」に焦点をあて、産業に関する事実の教授活動が中心となる授業を進める産業学習である。この型は、中学校以降の地理学習における「日本地誌」の準備教育という役割をになっている。中学校入試における産業学習の問題は、この型の産業学習を想定したものが多い。

③ 資本主義的エートス教育としての産業教育

この型は、①と同じく産業学習における「人々の工夫や努力」に焦点を当てた学習活動を行うものであるが、所与の条件のもとに少しでもコストを下げ、利益を上げようとする「人々の工夫や努力」に資本主義社会に特有な目的合理的に振る舞う経済人の姿を学び取らせるというものである。

④ 経済学教育としての産業学習

産業学習の目的を、社会科学的な見方、なかでも生産・流通・消費のメカニズムを解明してきた経済学の「理論」教授に求める立場である。経済的事象・出来事について誤りのない知識をつかみ、事実を説明する理論的枠組みを得させることを最も重視する立場である。

前述のようにキャリア教育とは、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」であり、その観点からは、どのような産業学習が望ましいのであろうか。

草原によれば、子どもの内面世界に積極的に関わりそれを変容しようと

というのは、①の類型だけとなる。しかしながら、この類型は仕事に打ち込む一途な姿に共感させるといった価値注入型授業に陥り、滅私奉公型の職業人を模範とする「前近代的キャリア教育」となる危険性がある。②の類型は、知識の量の確保を目的としているため、意欲・態度・能力といった目標を掲げるキャリア教育には適合しにくい類型である。③の類型は、アントレプレナー教育(起業家精神涵養教育)的な発想であり、キャリア教育の目標に適合していると言えるが、子どもの社会認識をどのように育てるかという点が曖昧になる可能性があり、社会科の目標という点からは離れるおそれがある。④の類型はマクロな形で職業・産業理解の視点を養うものである。そういった視点は将来設計・職業選択の際のバックグラウンドとなる知識であり、やはりキャリア教育の目標に適合していると言える。③の類型と比べた場合、すべての子どもにより一般性のある社会認識を育てる教材開発・授業設計が可能である。

(3) 先行実践の紹介

次に、犬山市立犬山南小学校における、キャリア教育の視点を取り入れた産業学習「わたしたちの生活と工業生産⁽⁵⁾」の実践を紹介したい。

① 授業のアウトライン

- i. 日時：2005年11月8日(水)5限
- ii. 授業学級：犬山市立犬山南小学校5年3組
- iii. 授業者：松永雅代氏

② 単元計画

- i. 単元名：わたしたちの生活と工業生産
- ii. 単元計画：1 生活をとりまく工業製品(1時間)
 - 2 自動車をつくる工業(10時間 本時9/10)
 - 3 工業生産と工業地域(5時間)

4 工業生産と貿易(5時間)

③ キャリア教育とのかかわり

i. 学習指導案「本単元とキャリア教育とのかかわり」より

本授業は単元計画に於いて、学習課題(学習問題)を設定する段階であり、子どもが新車開発プランを提案する活動を中心に位置づけている。これはアントレプレナー教育の考えを取り入れた学習活動であり、創造力、判断力、問題解決能力を培うことをねらいとしている。それらの「自ら学ぶ力」を身につけることで、職業観や将来の夢を育てることにつながるという研究仮説がたてられている。

ii. 焦点化する職業的(進路)発達に関わる能力⁽⁶⁾

*将来設計能力：生活に役立つという視点で、新車開発プランを提案することができる。

*情報活用能力：自動車会社の新車開発の方向性を知り、自分たちの生活との関わりを考えることができる。

④ 授業の展開

i. 目標：自動車に関する資料や身近な人々からの聞き取り調査をもとに、生活に役立つ新しい車の開発プランを発表し合い、今後の車づくりの方向性について理解することができる。

ii. 展開

〈授業を貫く問い〉「生活に役立つ新しい車とは何か」

〈学習活動〉 1 現代の車社会の問題点

2 消費者のニーズに応える車づくり

3 「生活に役立つ」をキーワードにした新車プランの発表

4 今後の車づくりの方向性の話し合い

〈子どもに獲得させたい知識〉

「車づくりは、環境や社会との調和を考えながら進めていかなければな

らない」

学習指導案から、本授業を分析すれば、「起業家教育」「ビジネスプラン」などのキーワードから、草原による類型③「資本主義的エートス教育としての産業教育」の授業であることがわかる。「コスト意識」という製造業に欠かせない視点が欠落している点から、起業家教育としては不十分である点や、「環境にやさしい」「人にやさしい」「安全」などの鍵概念の概念砕きが行われておらず、子どもの社会認識が十分に高まっていないおそれがある、といった課題が見受けられる。

しかしながら本実践は、キャリア教育との関連を特に意識し、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」に挙げられた「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」のうちから、授業で焦点化する能力を明確化し、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」に書かれている表現そのままではなく、社会科の単元目標に沿う形につくりかえ、その育成を図っている。この手法は、京都教育大学附属京都小・中学校(2006)及び児島・三村編(2006)の各教科におけるキャリア教育の諸実践とも共通する。各教科の授業でキャリア教育をすすめる際に、各教科の独自性を損なわない形で子どものキャリア発達を目指すには、一般性のある手法であるといえよう。

以上、先行実践を分析したが、キャリア教育の視点を取り入れた産業学習の先行実践は非常に少ない。筆者が最も望ましいと考える、キャリア教育の視点を取り入れた「経済学教育としての産業学習」の先行実践は管見によれば見あたらない。以下に類型④の授業設計の方向を示す。

2. 授業設計の方向

(1) 産業分類というストラテジー

以下では、第一次・第二次・第三次の産業分類という概念を子どもに獲

得させる学習活動を取り入れることで、経済的事象・出来事について誤りのない知識をつかみ、事実を説明する理論的枠組みを得させることを主眼に置くと同時に、キャリア教育の視点を取り入れた産業学習が可能であると提案したい。

第一次・第二次・第三次の三分法による産業3分類は、コーリン・クラークによるものが有名であり、もっとも簡単な産業分類である。第一次産業とは、自然に直接働きかけて食糧などを得る採集・栽培を基本とする産業であり、農業・林業・漁業が分類される、第二次産業とは製造業を中心として、鉱業・建設業などものづくりに関わる産業である。第三次産業とは、生産に直接関係しない産業で、商業・運輸・通信・金融・公務・サービス業などが分類される。

この第一次・第二次・第三次の産業分類は、現在日本においても最も一般的な分類法であるにもかかわらず、小学校・中学校の社会科に於いて直接学習することはない。小学校の社会科教科書及び地図帳などにも登場しない。ただし、中学校の地理教科書や地図帳の統計資料にはしばしば登場しており、中学校の社会科教師は、小学校で学んできたという事を前提に、授業においてしばしば何の説明もなく言葉や概念を使用する。さらに高等学校においては、小中で習ってきた自明の知識であるというとならえ方はさらに一般的であろう。子どもレベルで考えると、一度も学んでいないのに、何度も出てくる用語・概念である。社会科において小中の連続を考えれば、5年生の産業学習で習得すべき用語・概念であろう。

産業3分類は、ただ産業を分類するだけではなく、ペティ＝クラークの法則が付随する。塩沢由典⁽⁷⁾によれば、ペティ＝クラークの法則とは、17世紀の人ウィリアム・ペティと20世紀の人コーリン・クラークの二人が発見、主張した法則であり、「どの国でも経済の発展初期には第一次産業の人口比が高いが、経済が発展するにつれて第二次産業の人口比が増え、さらに発展すると今度は第三次産業が増大する」というものである。塩沢によれば、日本の最初の国勢調査が行われた1920年には、第一次産業に従事する

者は53.8%であったが、2000年の調査では5%と一貫して減少を続けている、第二次産業は、1920年には20.5%であったが、1975年に34.1%、2000年に29.5%と増減があり、第三次産業は、1920年には23.7%、2000年には64.3%と一貫して増加を続けている。このことから日本にもこの法則はよく当てはまると言える。なぜ第一次産業や第二次産業の人口が減るのだろうか。農業を例に挙げて考えると、農業が時代遅れの産業なのではなく、農業の生産性の向上で、より少ない農業従事者で必要な食糧が確保できるからである。

塩沢は、若い世代が産業分類およびペティ＝クラークの法則を知ることの重要性を、「各産業への就業人口の比率の変化は、将来、どんな産業で働くか、どんなビジネスが伸びるかを考える上で、重要な考察材料になる」と述べる。具体的な例として、「ものづくりが大切だ」という発言がよく聞かれます。その意見は正しいのですが、ものづくりで食べられる人口(つまり製造業就業者)が減っていくことには注意しておかねばなりません。」としたうえで、「第1次産業は、もっと下がるでしょう」「第2次産業の30パーセントという数値は今後低下せざるを得ません」「残り65パーセント以上は、すべて第3次産業ということになります」と結論づけている。

以上のことを子ども(学習者)のレベルで考えると、産業分類とは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの連鎖」のバックグラウンドになる理論的枠組みとなる。例えば、自らの将来設計の際して、「第一次産業・第二次産業は就業人口が減り続けており、効率のよいコストパフォーマンスと高い生産性(すなわちますますの「工夫」と「努力」)を要求されるだろう」「第三次産業は今後ますます増大してくるから、仕事として就業する機会も増えてくるが、未知の仕事も開拓され、競争が激しくなるだろう」といった認識を子どもにはたらかせることが可能な教材であるといえる。

(2) 「産業分類の授業」の知識構造

以上述べてきた、産業分類に関する知識をどのように授業化すればよいのであろうか。

岩田一彦によれば、社会科とは社会諸科学の蓄積してきた研究成果から構成される構造的知識の学習である。構造的知識の学習の観点に立って、岩田は言う「単元の学習内容が、構造化された知識として提示されれば、学習内容の定着性・応用度高まる⁽⁸⁾」。そこで、先ほどあげた産業分類に関する知識を以下に構造化する。

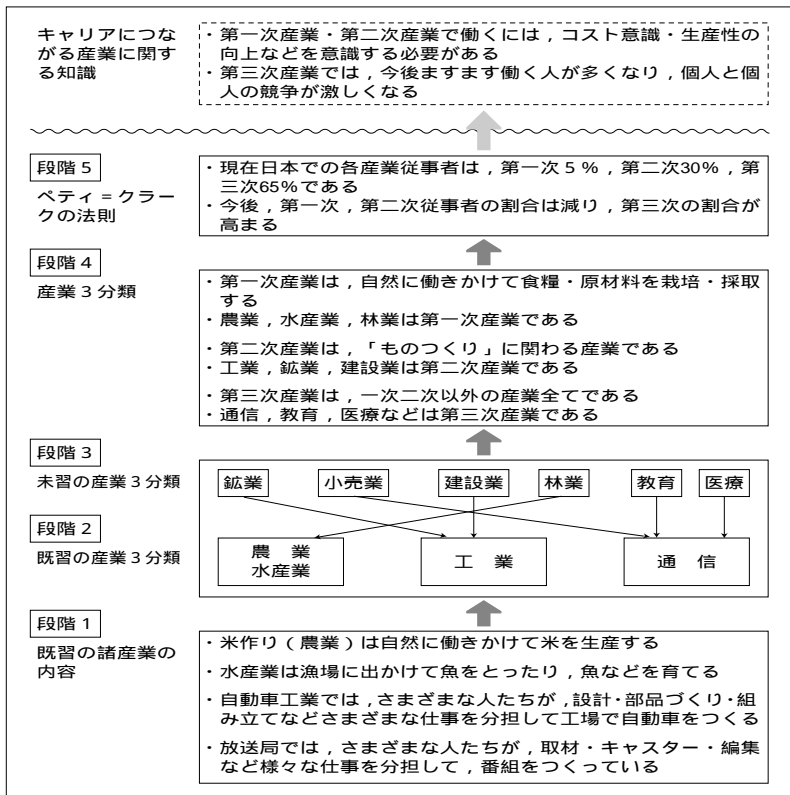


図1 「産業分類の授業」の内容構成

(3) 「産業分類の授業」の授業設計

① 小単元の位置

「産業分類の授業」は、さまざまな産業学習を終えた後のまとめの授業とする。岩田(2001)によれば、概念探究型の授業の単元構成の原理は、「知る」→「わかる」→「考える」の段階を踏む事が望ましいとする。これを産業学習に当てはめれば、以下の図のような単元構成となる。

すなわち、「農業」「水産業」「工業」「情報」に関する大単元の学習は、各産業について基礎となる知識を獲得する「知る」段階であり、「産業分類」は産業分類という社会的な見方が「わかる」段階である。

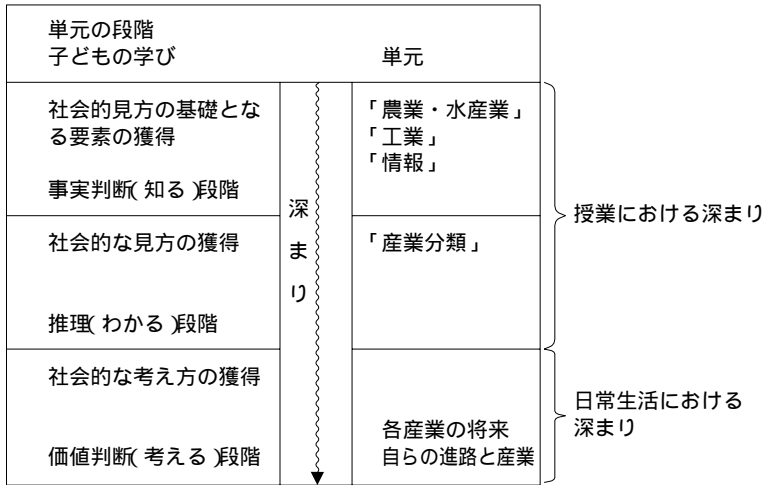


図2 概念探究型授業の単元構成の原理

② 焦点化する「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」

○情報収集・探索能力：第一次・第二次・第三次産業の概念がわかり、
様々な産業を第一次・第二次・第三次に分類する
ことができる。

○役割把握・認識能力：さまざまな産業の社会における役割やその変化が
わかる。

③ 指導計画

第一時「産業分類」してみよう

学 習 内 容	使用する資料	キャリア教育に関する評価規準
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">5年生の社会科で学んだ産業を振り返ろう</div> <ul style="list-style-type: none"> • 米作り(農業) • 水産業 • 自動車工業 • 情報産業 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">農業、水産業、自動車工業、情報産業を3つのグループに分けてみよう。</div> <p>農業・水産業 *食糧生産に関わる産業 *自然と関係が深い</p> <p>自動車工業 *工場でものをつくってる</p> <p>情報産業 *情報は目に見えない</p>	教科書 ノート	<p>【役割把握・認識能力】さまざまな産業の役割を振り返ることができる。</p> <p>【情報収集・探索能力】第一次・第二次・第三次産業という分類の基本となる概念がわかる。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">産業に関係するイラストも3つのグループに分けてみよう(中心となる課題)</div> <p>農業・水産業グループ：林業</p> <p>自動車工業グループ：せんい工業, 機械工業, ビル建設</p> <p>情報産業グループ：ガス会社, 運輸業, ヘルパー, 教育</p> <p>*それぞれ第一次・第二次・第三次産業と呼ぶことを説明する。</p>	イラスト プリント 資料1	<p>【情報収集・探索能力】第一次・第二次・第三次産業という分類の概念を使用して、さまざまな産業が分類できる。</p>

第二時 「第〇次産業」

<p>第一次・第二次・第三次産業はそれぞれどんな産業ですか。</p>	<p>各産業の就業 者数構 成比の 推移の 表 資料 2</p>	<p>【役割把握・認識能力】第一次・第二次・第三次産業の社会における役割を説明できる。</p>
<p>第一次産業：自然に働きかけて食糧や原材料を得る産業 第二次産業：「ものづくり」に関する産業 第三次産業：目に見えないサービスを売る産業</p>		<p>【情報収集・探索能力】グラフから各産業の就業者構成比の変化を正確に読み取ることができる。</p>
<p>それぞれの産業ではたらいっている人の数はどのように移り変わっていますか。</p> <p>第一次産業：減り続けている 第二次産業：1970年くらいがピーク 第三次産業：増え続けている</p>		<p>【役割把握・認識能力】各産業の社会における役割の変化に気づき、今後の変化を予想できる。</p>
<p>第一次産業や第二次産業が減っているのはなぜですか。</p> <p>人気がなくなったり、国が力を入れなくなったというよりも、生産性の向上や海外からの輸入の増加で就業者が必要でなくなったことを説明する。</p>		
<p>第三次産業の就業者数が増加しているのはなぜですか。</p> <p>高齢化・少子化・グローバル化・情報化など社会の変化で、さまざまなサービスが必要とされるようになっていくから。</p>		
<p>これからの社会では産業の様子はどのようになっているか予想してみよう (中心課題)</p>		

資料 1

授業で配布するイラストプリント



林業



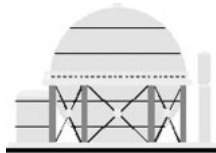
ビル建設



せんい工場



機械工業



ガス会社



運輸業



ヘルパー



教育

資料 2

日本における産業別就業者数構成比(%)の表

	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年
第一次産業	53.8	49.7	44.3	48.5	32.7	19.3	10.9	7.1	5
第二次産業	20.5	20.3	26	21.8	29.1	34	33.6	33.3	29.5
第三次産業	23.7	29.8	29	29.6	38.2	46.6	55.4	59	64.3

(塩沢由典 インターネット講座2005「創造都市の創造と市民社会の新たな展開」3より)

おわりに

社会科は社会と個人のつながりを考えたり、よき市民の育成を主眼とする教科である。一方でキャリア教育もよき市民・職業人の育成を主眼としており、2つの教育の理念は相通じるものがある。

近年の学力を巡る議論の中で、日本の子どもたちの社会的文脈の中でのリテラシー(読解力)の不足が叫ばれている。社会的文脈の中でのリテラシーの向上のためには、日々の社会科授業の中で子どもの社会認識を深めると共に、キャリア教育の視点の導入によって、学校での学びを日常生活における生活知とつなげることこそが必要ではなからうか。

注

- (1) ホイト編著・仙崎武他訳『キャリア教育—歴史と未来』(2005, 雇用問題研究会) p.59
- (2) マーランドの見解は、「学校と産業生活とのあいだにも有機的な関係が存在するべきである。だが、それは学校は子どもをなんらか特定の職業にむかって準備すべきであるということの意味するのではない。」(『学校と社会』)というディーイの言葉と通底する。この点から考えれば、アメリカのキャリア教育には非常に深い伝統がある。
- (3) 兵庫県教育委員会が全県的に取り組んでいる中学校2年生を対象とした職場体験学習「トライやる・ウィーク」、沼津市立原東小学校の総合的な学習による実践など。
- (4) 草原和博「産業学習」日本社会科教育学会編『社会科教育事典』(2000, ぎょうせい) pp.118-119
- (5) 犬山南小学校は2004・2005年度犬山市教育委員会等の委嘱を受けて、各教科を中心とするキャリア教育の研究をすすめた。以下紹介する授業実践は、同校研究発表会の公開授業指導案による。
- (6) 同校は、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』(文部科学省, 2004年)の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」(後頁参考資料)に基づき、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力をキャリア発達能力ととらえ、授業でその育成を図っている。

- (7) 塩沢由典「経済の大きな変化とスモール・ビジネス」インターネット講座
「創造都市の創造と市民社会の新たな展開」3(2005)
<http://www.shiozawa.net./jugyo/internetlectures2005/lecture3.html>
- (8) 岩田和彦『社会科固有の授業理論』2001 明治図書 p.40
- (9) 岩田(2001) p.93

文献・HP

- デューイ(宮原誠一訳)『学校と社会』1957 岩波文庫
- マックス・ヴェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1989 岩波文庫
- 文部省『小学校学習指導要領解説社会編』1999 日本文教出版
- 日本社会科教育学会編『社会科教育事典』2000 ぎょうせい
- 岩田一彦『社会科固有の授業理論』2001 明治図書
- 小学校社会科教科書『新しい社会5上下』2001 東京書籍
- 三村隆男『キャリア教育入門』2004 実業之日本社
- 文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力会議報告書』2004
- 犬山市立犬山南小学校研究資料集・公開授業指導案集 2005
- ホイト(仙崎武・藤田晃之・三村隆男・下村英雄訳)『キャリア教育—歴史と未来』2005 雇用問題研究会
- 塩沢由典「インターネット講座2005「創造都市の創造と市民社会の新たな展開」」2005 <http://www.shiozawa.net./jugyo/internetlectures2005>
- 京都教育大学附属京都小・中学校『これならできる「キャリア教育」—小・中学校の実践—』2006 明治図書
- 児島邦宏・三村隆男編『小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開案』2006 明治図書

